

出月康夫, 古瀬 彰, 杉町圭蔵 (編)

NEW 外科学 (改訂第3版)

上本伸二

京都大学医学研究科肝胆膵・移植外科学

本書『NEW 外科学』の序論で外科の歴史～外科の特殊性～医療の倫理と展開する執筆者の「外科学に対する思い」を楽しんで拝読した。常日頃、外科医の日常で考えていることを見事に論じており、これからの若い世代の外科医や医学生に読んでもらいたい内容である。

外科学教科書を評価する場合に、私はまず総論の内容に目を通す。本書においては、総論は全体の3分の1を占める充実したものとなっている。しかし、外科学教科書における総論には、現場の外科医療に役立つようにコンパクトにまとまっていることと同時に、基礎医学のおさらいをかねて理解を助ける工夫の2点が必要である。もちろん、外科医に限らず一般の臨床医が常に理解しておく必要がある範囲を超えての学問の広がり、各医学領域の専門書に委ねるべきであり、このあたりのバランスが教科書には必要となる。今回の第3版では、「免疫」、「腫瘍」、「臓器移植」、「人工臓器とME」に多く

の紙面が割かれている。最近の医療の進歩に対応する改訂であり、このくらいの知識の増加は、今後の外科医療の発展についていくためにも一般の外科医にも必要とされるものである。

各論は、臓器別の構造と機能、検査法を展開した後に個別の疾患に入れるように順序立てされ、理解しやすいスタイルとなっている。特に、構造の説明にはわかりやすい図がふんだんに使用されており、多くの外科的疾患を有機的に理解するための大きな助けとなる。各臓器の構造と機能を理解しないで、疾患の診断と治療を覚えても表面的な外科学の理解にとどまり、応用の効く本質的な理解とはならないためである。本書の特徴のひとつは、重要な疾患の最初に「ポイント」を配置していることである。「ポイント」には各疾患の基本病態コンセプト、診断治療における最重要事項が簡潔に記載されており、くり返し「ポイント」に目を通すことによって、単なる暗記ではなく生

きた知識として理解できる仕組みとなっている。また、本書には各種ガイドライン、取扱い規約、学会の診断基準が、必要に応じて配置されている。各種外科疾患の診断治療は日進月歩であるが、現状における診断と治療の重要なコンセプトを理解するためにはガイドラインや取扱い規約が適所に配置されていることが効果的である。また、臨床の現場において本書を参考にする場合にも非常に役立つものと思われる。

本書は外科学の本流にあるコンセプトを理解しながら、知識を有機的に増やしていき、診療の現場でも役立つ教科書である。医学生、外科修練医だけでなく、これまでの経験のある指導医にも読んでいただきたいものである。

●B5/頁 972/2012 年/定価 9,975 円
(本体 9,500 円+税 5%)

[ISBN978-4-524-22239-1]

南江堂 刊